
『終らない宿題』

愛弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『終らない宿題』

【著者名】

愛
弥

Z3226

【あらすじ】

冬休み最終日、終らない宿題を片付ける、高校一年生の成、靖、元稀、工の四人ほのぼのギヤグ話。

(前書き)

この話は、高校一年生の四人の日常を書いたような、雑な話です（^_^;）

気が強くて、リーダー的な成と、のほほんとしている靖と、元気つ子な元稀と、大人しい性格の工の話です。

今回の話は、靖と元稀の冬休みの宿題を、成と工が手伝う話です。

出来れば、この四人の話を色々書いていきたいです（^_^）

何故
宿題を
終わらせないんだ。
お前らは。

『終つてない宿題』

「……てめえらよお、何しに家に来たんだ？」

「ん？宿題斤しに。なあ？靖」

「うふ。そつだよ。何言つてるの成？」

元稀と靖の返答に、成の怒りが増す。

今日は、……冬休み最終日。

長かった2週間の冬休みも、終わりを迎える時がきた。

で、今ボクらが成の家に集まつて何をしてこるかといつじ。

長期休み恒例になつた宿題を[与]する会。

会つて言つても宿題をやつていなこのは毎回、元稀と靖なんだけだ。

成とボクは毎回やつてるから、見せる側。

……あ、因みにボクの名前は工。

今更自己紹介かよつていう感じかもしれないけどね。

「…ほう。お前らはそれでも宿題をやりに来たと言つのか」「だからそうだつてば。なあ?」「そつだよ。さつきから成しつこいよ。ねえ?」「えつ…ボクに振る?..」

変な所でボクに振らないで欲しい…。

そんなことば置こといて。

また成の怒り度が増してきぢやつてるよ…。

だつて成、口元は笑つてゐけど明らかに田は怒つてゐるもん。

……まあ、怒る気持ちは分かるけどね。

だつて、靖と元稀。

今、何してると思つ?

「いつて！何すんだよ成？！」

「黙れ。てめえらが悪いんだよ。俺をこんなに怒らせるから」

「あれ？成怒つてたの？」

「靖、てめえは人の表情さえ読めなくなつたのか？」

「いたつ！」

あーあ。

成ついに元稀と靖の頭ノートで呪いちゃつたよ。

でもまあ、自業自得かもしれないね。

だつて元稀と靖が今してるのは…

「てめえらな、『ントローラー』なくて鉛筆持て…！ゲームしながら何が宿題やつてるだ。だ？！喧嘩売つてんのか？！」

そう、元稀と靖がやつてるのはテレビゲーム。

成が怒るのも無理はないでしょ？

成の家来た途端、元稀が『あつゲームあんじやん！』って言ご出して。

それに靖が『やわらかー…やわらかー…』ってのつかつちやつて。

成とボクとで止めようとしたんだけど、失敗して、今の現状に。

最初の内は、一時間だけつていつ約束で許してたんだけど。

一時間経つても辞める気配はなくて。

ボクが一時間経つたよつて言つても、あと少し、あと少しつて言つて、もう三時間は経つてる。

涙れを切らした成が怒つても、聞く耳を持たない一人。

痛い目を見るのは間違いなく自分達なのに。

「取り敢えず、ゲームやめろ」

「あー…あとちょっと」

「それより成と二も一緒にやわらかよー」

「…………」

『楽しいよ～』と笑顔で誘つてくる靖。

別にボクと成はやつたって大丈夫なんだけど。

わざわざも言つたけど、本当に痛い目見るのはわづちだからね。

「元稀、靖。ゲームより宿題の方が大事なんだよ？だから早くやんないと」

「大丈夫だよ～。写すだけだから」

「そうだよ。心配はいらねえよ。写しゃあいいんだから」

「写せばいいっていう問題じゃないんだよ？分かってる？」

「大丈夫、大丈夫。どうせ俺らやつたって理解できねえから」

……やらなきや、理解出来るも出来ないもないじゃん。

ボクらが話をし終わつたその時。

『ブチツ』

といつ音が聞こえた。

その音の正体は…

「ちゅうおい成!! 何してんだよ?...」

「……や、宿題をやれ」

「テメツ、電源切るんだつたらせめてボタン押して消せよーーー」

「そりだよ。なんでもまたコンセントなんて抜いたの? 下手したら感

電して死んじやうんだよ?」

「んなことどうでもいいから、わざわざ終わらせる」

「いや、本当に危ないよ。成」

音の正体は、成がゲームのコンセントを引っこ抜いた音。

普通はあんま音ならないけど、今回は成が怒りに任せて引っこ抜いたから、『ブチッ』なんていう音が鳴った。

本当に危ないよ、成。

「……ま、明日だしやるか。成怒つてるじ」

「だね。やるうつか。ていうことで成、宿題みーせて」

「……ハ? てめえらだちやんとやれよ」

「「……え?」「

あれだけ騒がしかった部屋が、一気に静まり返った。

「……ちゅ、待てよ成。自分らでやれつじだいじだよ
「夏休みの時は見させてくれたのに。優しかった成は何処にいったの
?」

「……取り敢えず。てめえら、夏休みん時宿題写した結果がどうなつてんのか分かつてんのか?」

夏休みの時は、ボクと成は渋々一人に宿題を見せていた。

だけど、「一学期の一人の成績を見た成は、このままじゃ一人共進級するには危ういんじゃないかつていうこで、今回は見せずに一人にやらせようかつていう」とした。

分からぬ所は、ボクらで教えればどいつもかなるんじゃないかつて思つてたんだけど。

当の一人がこの状態だから。

終わるものも終わらない状況になつていて。

「俺はな、てめえらのことを考えて言つてやつてんだ。ホラ、分かんねえとこあつたら言つてみる。教えてやるから」

「…………」「…………」

「あ、じゃあ俺工の写すー」

「俺もー!」

「え、ボクも見せないよ。」

そう言つと、拗ねる一人。

ボクらは一人のことを見つけて言つてゐるのに。

「ホラ、さつさとやれよ。時間ねえんだから」

「だけじよお、俺らが今から努力したってどうせ聞に呴わねえぜ?」

「まあ、その確率は高いだろうな」

「そうしたら俺ら提出点もなくなるんだぜ?」

「あ、つ……」

しまつた。

そのことを考へていなかつた。

多分、成もボクと同時にそのことを思つていただろう。

「だつたとしても、それはお前らが悪い。」

「……ただけど、俺と元稀が進級出来なくとも成は別に構わないの?」

「……そつ、それはお前の問題だろ。俺には関係ない」

「親友を見捨てる気なの?」

「しつ、知るか。」

あ、成が段々折れてきた。

成はああいう、キツイ性格だけど、根は優しい性格だから。

あんなことを言われたら、段々手助けしてあげたくなるみたいだ。

ホラ、もう。

優しい部分の成が出てきた。

「…しゃあねえな」

「え？」

「……今回だけ、だぞ」

そう言って、宿題を靖と元稀に渡す成。

その行動に、思わず笑みが零れた。

「いいの？成？」

「…今回、だけだ。今回だけ。今後は一切見せねえからな」

「ありがとう、成」

「そのかわり、進級出来なくとも知らねえからな！！」

「おうよーー安心しろ！俺らは大丈夫だ！！なあ？靖

「うん！！」

「……馬鹿共が」

悪態を吐きながら、ほんのりと顔を染める成。

結局いつなるんだじゃん。

見せないでおいつつて話したのに。

「結局夏休みの時と一緒にだね」

「……つとに馬鹿だよ、あいつら。」

「『』書いたって成績は変わらないのにね」

「分かっておいたんだよ。あいつら馬鹿だから

きつと、次の大休連休の最終日も、今日みたいに、もしかしたらそれ以上に騒がしくなるんだろうな。

(後書き)

読んでいただきて、ありがとうございました（^○^）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3226j/>

『終らない宿題』

2010年10月28日07時56分発行